

植民地的主体形成論のために

——植民地支配確立期における西ケニア社会の歴史民族誌——

松 田 素 二

はじめに

「悪夢の選択」の地平

井上俊の秀逸な文明論の一つに「悪夢の選択」がある。言うまでもなくこの論文で井上がとりあげたのは、ポーランド生まれのイギリス人作家コンラッドの中篇小説『闇の奥』である。1885年のベルリン会議でヨーロッパ列強による勢力範囲の原則が「合意」されると、アフリカ大陸はまたたくまに分割され、英独仏はじめ列強の植民地にされていった。なかでもコンゴ地域は、ベルギー王レオポルド二世の私領とされ、そこに住む人々は、形式的にせよ他地域では要請されていた民主的手続きや「原住民保護」の建前さえ欠落した粗暴な植民地統治の犠牲となった。『闇の奥』はそのコンゴが舞台であり、作者コンラッド自身は、粗暴な統治をベルギー王レオポルド二世から委託された「奥コンゴ貿易振興会社」の社員であった。小説のなかではコンラッド自身と重なるマーロウ船長の体験として、勅許会社である植民地統治機関がおこなう「原住民」搾取と迫害の様子が生々しく語られる。

『闇の奥』は、20世紀初頭のヨーロッパ文学の傑作というだけでなく、今日のポストコロニアル的文芸批評においても、シェークスピアの『テンベスト』とならんでもっとも議論を呼ぶテキストの一つとなっている。マーロウ船長が惹きつけられる帝国主義のアフリカ支配のエージェントであるクルツの描写は、非ヨーロッパ系の文芸批評家や作家のあいだで肯定と否定の論争をまきおこした。クルツは、コンゴの奥地で「無知蒙昧な原住民」から象牙を買い集める会社の社員だが、高い学識と高邁な理想をいだいてその地で暮らしはじめたはずの彼は、物欲の虜となり「原住民」を大量殺戮し、最後には奇病に罹って「horror, horror」と声にもならぬ声を絞り出して死んでしまう。近代西欧文明の担い手が「未開な」アフリカで経験するこうした劇的な生き様（死に様）は、ポストコロニアルと呼ばれる今日の社会状況においてきわめて興味深いテキストとなっている。たとえばアーレントは『闇の奥』を、ヨーロッパの帝国主義を支える奇怪な人種主義思想の背景をしるうえでどの歴史書にもまさるテキストとして評価したほどだ。

ヨーロッパが帝国主義と植民地主義の時代を謳歌していたときに、植民地支配の非人間性をビビッドに描いたこの作品（初版は1899年）は、19世紀の最良の植民地批判文芸として評価されてきた。しかしポストコロニアル文芸批評において、その評価は逆転しはじめる。ナイジェリアの作家チヌ

ア・アチェベは、コンラッド自身を「血塗られた人種差別主義者」と呼び、この作品を「悲しむべき書物」と評した。アチェベは、アフリカを「否定された土地」として一元的に表象し、そこで暮らす人々（アフリカ人）を人間性を欠いた生き物として平気で描けるコンラッドの心性を問題にした。コンラッドが生きたビクトリア朝の人種主義意識は、この作品のなかの基調となっている批判に対して、サイドも賛同する姿勢を明らかにしている。彼は、『闇の奥』が人種間の差別序列に挑戦するどころか、その序列化された現実を容認し、それを容認する社会意識を補強していることを強く批判したのである。

もちろんこうした『闇の奥』否定の論調への反駁もなされた。アフリカ人作家が使用する言語をめぐる、アチェベと激しい論争を展開したケニア（ギクユ）人の作家、グギ・ワ・ジオンゴは、人種問題に関するコンラッドのあいまいなスタンスを指摘しながらも、帝国主義が「正義」だった時代に、『闇の奥』がアフリカ人に対する残虐な仕打ちを告発したことの歴史的評価をまず第一におこなうべきだと主張した。

このようにこの小説は、人種主義と植民地主義が跋扈した時代のアフリカ社会を作家がどこからどのように記述するのかをめぐる、さまざまな論争の母胎となっていたのである。しかしながら、井上の視点は、こうした論争とは別次元に据え付けられる。井上はそうした作品に対する政治主義的解釈（現実の国際政治力学であれ、表象の政治学であれ）だけでは満足しなかったのである。

井上は、粗暴で直裁な植民地支配を実行する植民地統治会社の人間をとりあげて、マローウ船長の目を通して、「悪夢の選択」にまつわる苦悩のなかに、西欧近代文明の宿業とそれと葛藤する人間性の可能性を探ろうとした。彼はコンラッドが近代文明論の特色として、エゴイズムと理想主義に加えて「懐疑」を重視したことに着目する。この三者の動的均衡によって近代文明は推進される。ところが、三者の動的均衡はつねに揺らいでおり、それは個人の内面世界においても例外ではない。こうした近代文明の三要素間の揺らぎがもっともストレートに表出する場こそが、アフリカ大陸の、それも「奥地」にやってきた植民地支配のエージェントの世界であった。

そこにおいては、アフリカ人から搾り取るだけ搾り取って富を得ようとするエゴイストや、極端な理想主義に燃えて文明の伝道をはかろうとする宣教師も生まれるし、懐疑の矛先が自身の存立に向かい懐疑主体を懐疑する、懐疑のための懐疑を生きる（そして結果的には自死してしまう）人間すら登場する。こうしたエゴイズム、理想、懐疑の緊張したダイナミズムのなかで近代文明は営まれることになる。もちろんこうした近代文明自身の正体を見破り、それを拒絶して生きるという選択肢も可能ではある。コンラッドの時代から100年後の世界においては、西欧近代の形成してきた「文明」は拘束的なものとして批判され超克される「対象」となってしまった。ポストモダンという名で呼ばれる思潮は、近代文明そのものを生の選択から除外してしまったかのようだ。

これに対して井上は、矛盾と拘束と欺瞞のうずまく近代文明のなかに、自己の生を営む場を選択することを「悪夢の選択」と呼んで祝福したのである。近代文明のもつ悪魔的な力を単純に忌避し非難するのではなく、そのなかで醸成される人間の可能性をすくいあげようとする井上の視点は、機械的な俗流ポストモダン派やそれへの直反発として登場したモダン原理主義派が混在する現在の社会理論において貴重な指針を提供するものである。

植民地社会論の再構築

井上が「悪夢の選択」で示した人間論は、井上自身が意識した文明論的な意義だけでなく、もう一つの可能性を切りひらいた。それは植民地社会論の再構築に繋がる意義である。これまで植民地社会を論じるさいの基本的な枠組は、政治・経済・文化・社会的領域における中心に位置するものと周縁化されるものとの不平等で非対称な関係性であった。アフリカ社会の場合、ヨーロッパの宗主国からやってきた入植者や行政官、宣教師などは「搾取する側」に位置し、現地のアフリカ人は「搾取される側」に位置づけられる。植民地支配という構造においては、白人は加害者でありアフリカ人は被害者だったのである。

ところが1980年代後半以降、盛んになった植民地社会論の再検討においては、こうした構造的見方を機械的として批判し、白人入植者や行政官の内面に踏み込んだ研究や、アフリカ人のあいだで率先して植民地支配のモードを取り入れそれと協同した「コラボレーター」を見直す研究などが登場し始める。つまりマクロな政治・経済構造による一元的社会把握ではなく、人間の葛藤と揺らぎを射程に入れた植民地社会論が要請されるようになったのである。こうした植民地支配の記述を異化し複眼化する社会理論には、植民地的主体を一方的にロマン化してしまう危険性がつきまとうものの、植民地社会についての議論を一新させたことは間違いない。「勅許会社」ではたらく植民地支配を実践する白人の苦悩と自壊を、複眼的に分析する井上の視座は、こうした植民地社会論の再構築を先取りし示唆を与えるものでもあった。

本稿の目的は、植民地社会論の更新のために、マクロな政治経済構造ではなくミクロな日常世界に視線をおいて、その社会で生を営んだ人間の経験によりそった社会の再構成を試みることにある。井上が鋭くえぐり出した個人の内面の葛藤にはとうてい至らないけれども、植民地支配が確立し、徴用と徴税のシステムに飲み込まれ、賃労働にかりたてられはじめた西ケニアの1920年代を、マクロな構造とミクロな実践の相関によって再構成することは、これまで植民地政府の文書によって一方的に記述されてきたこの時期の社会を書き直すために必要な作業である。それはまた、植民地状況という圧倒的に暴力的で拘束的な社会構造において、そこで生を営む人々がいかにして主体を形成していくのかという議論を開拓するはずだ。これまでの植民地的主体形成論は、先述したように、一方的受動者あるいは一方的被規定者として植民地の生を均質化してきた従属的主体論（植民地権力が移植した近

代的価値と制度、ライフスタイルによって、旧来の主体形成装置は瓦解し、一方で移植された人間像に身の丈をあわせる過剰な同化とスキゾフレニックな主体の拡散状況が生じているとする）と、それに抗する形でこの15年あまりのあいだに勃興してきた植民地社会における自律的主体創造論（植民地状況において人々はそれを自在に改変・再創造して相対的に自律した主体形成を成し遂げたと主張する）という二つの立場に大別することができる。本稿は、この両者を批判しながら第三の主体形成論を構想するために筆者が行ってきた一連の作業の一部を構成している（松田、1997,1999,2000,2002 予定）。

この作業の対象となるのは、西ケニアのビヒガ県ムンゴマ郡にある山村社会に暮らす人々の経験である。彼らは民族的にはマラゴリ人と呼ばれている。彼らが住むマラゴリランドは、ケニアがイギリスの植民地となった1895年直後からキリスト教の宣教師が大挙して入り込んだ地域でもある（1902年まではウガンダ保護領の一部であった）。

私は1979年以降、この地域でフィールドワークをつづけているが、植民地化の歴史については、南マラゴリ地方のK村に19世紀末から20世紀初頭にかけて移住してきた、ある父系の一族の経験に関する聞き取り、ライフストーリーの記録、それに彼らの居住地区を管轄する植民地行政文書の解説を中心に考察することにする。その一族は、オンビサ（仮名）という一人の男によって形成されたものだ。もちろんオンビサの一族は、彼らだけで独立した出自集団を構成しているわけではない。彼らの親族は西ケニア一帯に移住し、さまざまな民族に同化しながら共通のアイデンティティを有していた。彼らの総称としてはニャメザ一族（Avanyametha）という名が用いられる。オンビサ自身は1960年代前半に死亡しているが、2001年現在、その子孫は優に100名を越える。植民地支配が西ケニアの村々にまで浸透した1920年代という時代は、オンビサもすでに成人し二人の妻（彼は最終的には四人の妻を得た）は七人の子供をもうけていた。

1 K村と白い国

メンゲクラン創成

南マラゴリに圧倒的な武力を背景とする「イギリスによる平和」が訪れたちょうどそのころ、よちよち歩きのオンビサが母オガに連れられてナメザ地方に漂泊してきた。彼らはひとまず同じニャメザ一族であるオンビサの一族に世話になり、現在のナメザ村に落ち着いた。オガはそこで彼女にとっては三番目の夫となるオカンガと再婚したが、第一夫人の強い嫉妬と恐怖を引き起こし、結局短期間で追い出されてしまう。プニョレ人であったオガは呪医としても有名で、第一夫人は彼女から呪咀されるのではと怯えたのである。そのためオガたちは同じニャメザの一族を頼って、K村までやってきた。

彼女はそこで、ゲハヨ克蘭の食客（アバメニヤ）として土地を分けてもらい、治療師をしながら生計を立てていた。オガに言い寄るゲハヨ克蘭の男も少なくなかった。

しかし両一族のあいだの良好な関係は、長くは続かなかった。悲劇はオガが可愛がっていた子供たちの頭上に訪れた。現在のK村中央部の土地に、彼女が小屋を立ててしばらくすると、不思議なことに、そのゲハヨ克蘭の子供たちがばたばたと流行り病で死亡してしまったのである。その災厄は当然オガの邪術のせいとされ、ゲハヨ克蘭の人々は怒りかつ脅えながら、とうとうK村を捨てた。彼らは、隣のリャナギンガ村まで避難してそこに集落を築きなおした。こうしてゲハヨ克蘭が逃げて無人になったK村中心部の広大な土地は、そのままオンピサが占有することとなったのである。ゲハヨ克蘭の避難民はオガが死んだ1920年代になって、K村に戻ってきて土地の返還をオンピサに要求した。今日まで続く両者の土地紛争の始まりである。

オンピサが移住してきた当時、つまり今世紀初頭は、「イギリスの平和」によってモノの流通が広い範囲で可能になった時代であった。ここナメザ地方では特にタバコの栽培が盛んになり、あちこちに市が立った。なかでも今日聖公会の教会があるオンピサの土地に立った市には、マラゴリ人だけではなく、ルオ人、イスハ人、ブニョレ人のバイヤーが集まり空前の賑わいを見せていた。タバコはバナナの葉の上にのせられ、それを巻いて草紐できつく締められて売られていた。この完成品をタバコのジメンガと言う。そのためにマラゴリの人々は、タバコを栽培しジメンガを売るニャメザ一族をアバメンゲ（メンガの人々）と呼ぶようになった。それまで彼らは、ニャメザの人々、アバニャメザと呼ばれていたが、このときから新たにマラゴリ風の克蘭の呼び名としてアバメンゲが自称、他称として流通するようになった。メンゲ克蘭の誕生である。

白人入植者の国

オンピサたちが新しい克蘭を名乗り始めた時代は、東アフリカにヨーロッパからの植民者が姿を現した時代でもあった。1901年、ウガンダ保護領の長官ジョンストンは、西ケニア（当時の東部州）についてこう述べている。「ここはヨーロッパの移民者にとってイギリスや（カナダの）ブリティッシュ・コロンビア、南アフリカと同様快適な土地だ。アフリカの多くの土地はインドと同じく、資源は豊かでもヨーロッパ人にとって自分の故郷とすることはできない。だが東部州は自信をもって言うことが出来る。『ここは白人の国になりうるのだ』と」。翌年西ケニアは、ウガンダ保護領の管轄を離れて東アフリカ保護領に移管され、キスム州（後にニャンザ州）となった。これは首都からの交通・連絡の困難を主たる理由とする再編であった。だがホブリーは引続き州長官としてとどまった。

マラゴリや西ケニアの人々が新たに組み込まれた「東アフリカ保護領」は、ヨーロッパからの移民ブームが始まったばかりであった。そこでも長官エリオットが「保護領の内陸部は白人の国とし、白人の利益を至高のものとする」と宣言していた。植民地政府は「広大で肥沃な無人の地」が東アフリ

力にあると宣伝したため、白人の数も、1900年には480人であったものが、1903年には790人、1906年には1,800人と膨張を続け、1914年には5,400人にも達した。ジョンストンも、あの人口過密で村の数の多さに白人探検家を驚かせた西ケニアを「原住民の姿も見かけぬ」と記しているし、ナイロビ付近では、1897年の大旱魃と牛疫で無人の地になったキクユランドを見て、本気で、自分がこの地の最初の住人になったと思い込んだ白人入植者もいたほどだった。

この「誤解」に気づいた植民地政府は、1902年に「王地条例」を一方的に発布して、ケニア中央部の広大なもっとも肥沃な農業適地を「クラウンランド」と宣言し、アフリカ人農民から巻き上げた。いわゆるホワイトハイランドの誕生である。この土地を今度は99年間の期限で（1915年に改訂して1999年に変更）安く白人入植者にリースした結果、多くのプランテーションが産声をあげた。初期入植者としてやってきたのは、南アフリカからのボーア人農民やイギリスの没落貴族や没落農民であった。貴族のなかにはデラミア卿のように一人で17万エーカーの土地を保有する大地主もいたが、多くは金に困ってケニアにやってきた貧乏貴族であった。その一人にクレインワース卿がいた。

クレインワースは1905年にケニアに渡る決心をした。勇壮なハンティングに惹かれたことも事実だが、第一の理由は金に困っていたことだ。周囲が「かわいそうに若いクレインワースは気が狂った」と心配するなかを、スワヒリ語の勉強にも励み、翌年にはモンバサ港に到着した。そこでは西ケニアから州長官として赴任していたホブリーにも会った。その印象は「優秀な行政官であるとともに素晴らしい博物学者」というものであった。彼はナイロビ北方の丘陵地帯に入植し、サイザル麻のプランテーションを始めた。もちろん彼には何の農業の知識も労働力もないので、専門家のアドバイスに従って「夜明け前から原住民を教え監督する」ことが彼の仕事となった。彼の農園に限らず、白人が経営するプランテーションは大量の肉体労働者を必要としていた。クレインワースは土地を白人に奪われた付近のキクユ人を雇用していたが、彼らとのあいだの関係は農園主と労働者の関係というよりも、奴隷主と奴隷との関係に似ていた。クレインワース自身も次のように告白している。「きびしく原住民をしつけると不人気になりそうだが、実際はそうでもない。原住民を頻繁に打擲しても彼らにはなつかれる。それは犬と主人の関係のようなもので厳しくしてやれば尊敬が得られるのだ」。

クレインワースは今世紀初頭、ケニアに殺到したヨーロッパ人が形成した「入植者文化」の担い手の一人にすぎない。当時のケニアには大小さまざまなクレインワースが存在していた。彼らは1907年に保護領政府が立法審議会を設立すると、3名の代表議員を送り込み自らの利益保護に奔走した。入植者の最大の要求は、安価で安定した労働力の供給であった。ある入植者組合の代表は、総督に対して「この国に我々を招いておきながら、我々が自分の手で労働しなくてはならないとは滅茶苦茶ではありませんか。これによって我々の入植活動すべての基盤は根底から揺らいでおります。私たちが望んでいるのは、いうまでもなく安価な労働力であります」と述べ、政府にアフリカ人を村から連れ出して白人農園で賃労働するように仕向けるべきであると強硬に申し入れた。

こうして西ケニアの片隅で農耕生活を営むオンビスたちと、ヨーロッパからの入植者とのあいだを繋ぐ巨大なうねりが起こり始めた。白い政府は、アフリカ人を村から狩り出す仕掛けを準備したのである。それは人頭税という仕掛けであった。

2 人頭税と賦役

ウガンダ保護領の長官ジョンストンが、本国に徴税の許可を求めたのは、1899年12月のことだった。彼はユニオンジャックの旗に服属した諸部族に「友好の証」として小屋税を課することを思いついたのである。この案は翌年2月に裁可され、年間3ルピーの小屋税がイギリスによって制圧された地区から順に徴収された。当初は、山羊（一頭2ルピー）や鋤それに賦役などの現物納も認められていたように、服従の象徴としての意味も大きかった。しかしケニアの場合は、この税金にこめられた支配の仕掛けはもう少し直截なものとなった。植民地政府はこの税金を通して、一石四鳥の効果を狙ったのである。それは象徴的な支配の確認とともに、白人のための国造りの費用として、徴収のための末端行政網確立の契機として、さらに白人農園に必要な労働力創出の手段として、フルに活用された。

ケニアの場合、白人の国を標榜しているにもかかわらず、白人入植者からは税金を徴収していない。彼らが強硬に拒否していたからである。だが植民地の予算処置の大半は、白人居住者のためのインフラ整備に費やされた。全体の歳入のだいたい6割から8割を税金として拠出するアフリカ人には、ほとんど何の見返も与えられず、逆にアフリカ人を酷使する白人農園主がその金を自分たちのために使っていたのである。これは二重の搾取といってよい。つまりアフリカ人は白人農園で低賃金で働かされるとともに、自分たちの支払った税金を彼らに貢がされるという構造が成立していたのだ。

行政首長制の導入

税金が導入されると、それを効率的に徴収する制度が必要になってくる。ケニアの場合はそれが行政首長制という形で実現した。もともと首長など存在しなかった社会に、むりやりチーフやアシスタント・チーフをでっちあげて「原住民による原住民支配」を装おうとしたのである。こうしたアイディアの背景には、ヨーロッパの「未開社会」に対するパターン化した認識がある。ヨーロッパの文明国が、民主的な契約に基づいて国家を形成したように、「未開」なアフリカ人は首長のもとで百年一日のような停滞的な部族生活を営んでいるというイメージは、アフリカ社会に彼らが実際に侵入する以前に創られ信仰されてきたものだ。

西ケニアでも1902年に「ビレッジ・ヘッドマン条例」が成立すると、各地にヘッドマンが誕生した。条例にはヘッドマンの仕事として、地域の秩序を維持し、道路のメンテナンスを行い、税金を徴収す

るとある。つづいて「原住民オーソリティー条例」も公布され、ヘッドマンの上位にチーフの官位を設けた。西ケニアの場合、さらにその上に、パラマウントチーフがつくられ、白人来訪の初期から協力者としての役割を果たしてきたワンガ人の王、ムミアがその職に就いた。ムミアの兄弟や親族はチーフに叙されて、西ケニア各地の異民族の支配者として派遣された。こうしてイギリスの未開社会観にそって、王ーチーフーヘッドマンという「原住民」の政治組織が発明され、徴税や労働力調達機構として機能することになったのである。

オンビサたちの暮らすK村にもその変化は押し寄せていた。西南隣の峰にあるムスングティ村のオンボドは、ヘッドマンに任命され、自らをムワミ（王）と名乗るアナクロぶりを発揮していた。彼は15人近いアスカリ（護衛）を置き、村人が彼に直接口を聞くことを禁じた。だがバガンダ宮廷を真似たこのやり方は、村人たちから相手にされなかったようだ。しかしワンガ王ムミアと、プテレにいるムミアの弟でチーフのムラマに、モロコシやシコクビエを毎年5俵ずつ貢納することによって、しばらくのあいだ彼は、舶来の権威を維持することに成功した。

このワンガ王を頂点とする西ケニアの行政首長制は、1910年代から行き詰まりはじめ、20年代には崩壊してしまう。各民族集団がワンガの専制と膨張主義に反発し、ワンガ人チーフの命令を聞こうとしなくなったのである。その結果、徐々にワンガ人チーフは地元の民族出身のチーフに取って代われ、1926年のムミアの死後はパラマウントチーフ（1913年にオフィシャルヘッドマンと改称）も有名無実化してしまう。南マラゴリでもオンボドは廃され、精力的で政治的なパウロ・アゴイがチーフ職に就いた。

賃労働の強制

徴税の最大の眼目は、アフリカ人を村から追い立て、白人の政府や農園のために賃金労働に従事させることであった。1906年にはナイロビ近郊のプランテーションで初めて労働力の不足が深刻化した。以後ケニアにおいて、独立にいたるまで続く労働力日照りのはじまりである。この危機を察した政府は、それまで認めていた税金の物納を禁じて、金納を義務づけた。現金獲得のチャンスのない村に住むアフリカ人にとって、税金を支払うためには、村を出て賃金労働せざるを得ない状況をつくろうとしたのである。入植者の大ボス、デラミア卿は農園主の心情を率直にこう語っている。「原住民を居留地から追い出して雇用を求めるようにさせるには、徹底した徴税しかない。だが賃金を上げたら原住民が大勢村から出てくるだろうと考えるのは誤りだ。むしろその逆で、村から人が出なくなる。なぜなら少数の男が代表として町に行くだけで、税金が払えてしまうからだ」。

しかしデラミア卿の思惑にもかかわらず、村を出るアフリカ人は目だって増加することはなかった。ついに白人農園主は労働力不足に悲鳴をあげ始めた。彼らは自分たちがアフリカ人から取り上げた土地の一分程度しか耕作できていなかったのである。そこで考え出されたのが、税金作戦の第二弾だ。

従来の小屋税では小屋を所有している男性以外には税をかけることができなかった。この税の網から逃れた男たちを捕捉するために 1910 年以降、新たに人頭税が創設され、18 歳以上のアフリカ人の男全員に税金が課された。それによって出稼ぎを促進しようとしたのである。マラゴリランドにもこの徴税の波は襲いかかった。それはその翌年 1911 年に誕生した割礼組の名にも表れている。その年割礼を受けた男たちの名称は、税金を支払った証明である小さな紙切れにちなんで「キチティ（小さなチケット）」と呼ばれることになったのである。

度重なる賃労働者化政策の波に直撃されても、マラゴリの人々は依然として村を出なかった。この時代の行政記録を見ても、イギリス人行政官の苛立ちがにじみ出ている。例えば「カヴィロンド人はホームランドから遠くに連れて行かないと働こうとしない。……彼らは臆病な部族で脅せばすぐに逃散してしまう。（1905-6 年）」「マラゴリは勤勉な農耕部族だが、規律にそって欠点を修正することはしない。また人々は故郷を離れて出稼ぎに行くことを極端に嫌がる（1910 年）」といった調子の記述が毎年のように登場している。事実 K 村でも、この時代まだ誰一人として出稼ぎに出たものはいなかった。

デラミア卿らも入植者の死活問題としてアフリカ人の賃労働者化を望んだが、一方の植民地政府もポーターや道路工事などでアフリカ人の労働を必要とした。だが政府は、税金徴収によるアフリカ人の狩り出しという悠長な手段を採らなかった。より直接的な賦役の強制という道を選んだのである。それは西ケニアの場合、1898 年にホブリーが友好の証として荷役運搬の人力の提供を求めたことに遡る。今世紀に入り、ワンガ王を頂点とする行政首長制度が完成すると、そのヒエラルキーを活用して人夫を村々から狩り集めた。チーフ、ヘッドマンにノルマを割り当て、アスカリ（護衛）を使って若い男を検挙することまでしたようだ。アフリカ人は一年に 24 日間、地元の公共工事への労働奉仕が義務づけられた。これは無給である。それとは別に、政府の港湾整備、道路建設、荷役運搬などに年間 60 日の労役も提供しなければならなかった。有給とはいえこの賦役の負担はかなり大きかった。それにチーフやヘッドマンたちは、アスカリを使って強制的に狩り集めた村の青年を、人手不足に悩む白人農園にも売り渡したので、1910 年代の半ばになると、マラゴリ人青年の村外流出が始まるようになった。いよいよ出稼ぎ時代の幕開けである。

3 村からの出稼ぎ第一号：第一次世界大戦とケニア

ヨーロッパで第一次世界大戦が勃発すると、ケニアにも緊張が走った。南隣りのタンガニーカはドイツの植民地としてドイツ人入植者とドイツ軍が存在していたからである。内陸部を中心に幾度か激しい戦闘が闘われた。この白人同士の戦争に、多くのアフリカ人が参加を強要された。その数は 1914 年から 17 年までだけをとっても 16 万人以上にのぼり、そのうち実に 4 万 6 千人以上が生きて村には

戻れなかった。彼らはほとんどが、政府—チーフ—ヘッドマンという行政網を通して強制的に徴用された犠牲者だった。またその大半は、兵士ではなく、ポーターなどのキャリアコープ（運搬部隊）として従軍させられた。西ケニアだけをとりても、毎年一万人以上の若者が戦場に送られた。彼らは月6ルビーの給料で生命を賭けさせられたのである。

戦争にアフリカ人が動員されるにつれて、白人入植者のあいだでは不満が高まっていった。戦火で物不足になっているヨーロッパは、彼らにとっては格好のマーケットとなったのだが、肝心の労働力が戦争のために決定的に窮乏してきたからである。この時代まで、もっとも一般的なアフリカ人賃労働者の供給源はキクユ人であった。なぜなら彼らは自分たちが耕作していた土地を、白人によって一方的に「クラウンランド（王地）」として取り上げられ、耕すべき土地を失っていたからである。代替地として政府から与えられた不毛なブッシュや半乾燥地に移住するキクユ人はほとんどいなかった。彼らは引続き、もとの自分たちの土地に「不法居住者」として居座った。その一角を耕作して白人農園主に小作料を納めることで生計をたてていたのである。

だが白人農園主が欲しかったのは、小作料ではなく彼らの労働力であった。そこで1918年には、政府に圧力をかけて「居住原住民条例」を成立させた。これによると、もとの自分の土地に「不法居住者」として滞在しているアフリカ人は、年間180日以上労働を農園主に提供した場合に限って滞在が合法的に認められることになった。ここまではキクユ人の賃労働者化を強制した結果、1928年にはキアンブ県の15歳から40歳までの成人男性の実に四分之三が出稼ぎ民化してしまったのである。

だが増加する一方の労働力需要は、キクユ人だけでは賄えるものではなかった。そこでカンバヤルオなどと並んで白人政府に目をつけられたのが、「穏健勤勉」な西ケニアの「バントゥー・カピロンド族」であった。戦争開始とともに、西ケニアにおいてもチーフとヘッドマンを使ったなりふり構わぬ強制徴募活動が浸透し、それまでの税金による炙り出しを逃れていた多くの若者が、村から官憲によってむりやり連れ出された。1915年のキクユ地区の行政記録にも、「ウガンダ鉄道の沿線で蒸気機関車のための薪の切出しのため大量のカピロンド人が連れて来られ、その数はキクユ人の数に匹敵する」と述べられている。この傾向は戦争中に一層加速し、戦争が集結した1920年には、「入植者の労働需要は今やキクユ人の潜在的供給能力をはるかにオーバーし、それゆえにカピロンド人が広範に用いられている（キアンブ県年次報告）」という状況が出現した。

徐々に西ケニアに襲いかかる強制徴募の波は、1918年ついにK村にまで及んだ。それまでにも1915年頃には、戦争のためのポーターとキャンプの設営やコックの要員として、各村ごとに10名の割り当てがなされ、それが実際には初めての徴用だったのだが、このときはどういうわけか誰もハントされずにすんでいた。しかし二回目はそういうわけにはいかなかった。当時K村のムラニは、南のリヤマガレ村にいたムランゴ（ヘッドマンと同様数か村を管轄するチーフの下役職）のアシスタントをしていた。そこにチーフ・アゴイから強制徴募の命令が届いた。ムラニは村の若者を狩り出すべく各戸

をまわった。そこでこの命令に逆らえばヴィヒガの牢屋に入れられること、一月間村を出て白人のところで働くだけで5ルピー（1916年に値上げ）の税金は完納できることを説いた。

ムラニの説得に応じて4人の若者が村を出て、ヴィクトリア湖畔の町キスムに連れて行かれた。そのなかの一人が当時20歳になったばかりのゲハヨ克蘭のフライムであった。フライムはいったい自分がどこに連れて行かれるのかもわからず、駅のそばの建物で待たされた。ある日そこに移送担当の白人が来て、行き先ごとにアフリカ人を区分けしていった。プランテーション、工場、土木工事、ハウスボーイといった職種と場所ごとの人数が書かれた書類を見ながら、役人は適当に分けていった。フライムたちK村から徴用された4人は全員、ナイロビのそばのキクユ駅まで行けと指示された。わけのわからないまま一晩かけてキクユ駅に着くと、そこにも白人が待っていて、どこそこの農園に何人と汽車に乗せられたアフリカ人を振り分けていった。4人は結局、キクユのコーヒー農園へと運ばれ、そこでコーヒー摘みの仕事を六ヶ月間するように命じられた。戦争中の人手不足で収穫の危機を迎えていた農園主の強い要求に屈して、政府は行政ルートを通じて強制徴用したアフリカ人を、民間の入植者にまわしていたのである。

こうしてK村からの出稼ぎが始まった。ムラニはそれ以降、1928年までほぼ毎月数人の男を村からキスムに送り出した。彼の行為は、ムランゴから命令されたものだったが、その命令は実はムラニの知らないはるか上から出されたものであった。1919年に「東アフリカ保護領」の新総督に就任したノーゼイは、着任早々有名な布告を出した。彼はそのなかで、支配下の地方行政官全員に、「あらゆる合法的な手段」を行使して「原住民の成人男子」を労働者とすべく村から狩り出すことを命じたのであった。この命令の最末端の執行者がムラニだったというわけだ。しかしこの命令は、先述したような強権的な人狩りを生み、しかもそれが民間の農園のためにも行われていたことは、教会関係者などの反発を招いた。1921年イギリス本国の植民地相になったチャーチルは、このやり方を止めさせ、以後政府の公共事業以外の目的では、行政網を使った強制的労働力徴募は行ってはならないということになった。

政府からの割り当てにそって、K村からも強制徴用者が初めての出稼ぎに出たとき、オンピサはどうしていただろうか。オンピサはそのころすでに、母譲りの薬草の知識を生かして呪医として名をなし、K村の有力者の一人となっていた。彼はこの時期教会にも行かず、賦役を課するヘッドマンにも反抗的であった。ムウェネシは、植民地支配下のケニアのアフリカ人の対応を三つのタイプにまとめている。白人に協力するミッションボーイと、過去を礼賛する伝統主義者と、両者の折衷派という三つである。ムラニが第一類型に属するとするなら、オンピサは第二のタイプであった。しかしこのような類型は、ある意味で表層的にすぎる。人は常に外部からの大波に、揺られ飲み込まれながら、その波のなかで生を営むものだからである。オンピサも、大戦中に教会学校に名を登録しておけば、軍事徴用を免れることを知ると、さっそくマセノの教会学校を訪問している。キリスト教も、彼にとっ

ては自分の生活戦略のためのカードに過ぎなかった。しかし彼自身は生涯一度も出稼ぎには出なかった。呪医として村で生を全うすることが、彼の選んだ人生だったからである。それを豊かにする限りで、彼はキリスト教のみならず、トタン屋根でブロック建ての家など「白人風文化」を積極的にとり入れた。薬草の知識を息子たちにも教える一方で、彼らを教会学校に通わせた。それが抵抗でも屈従でもない、彼の生き方であった。

4 三つの出稼ぎパターン

初の出稼ぎを強制的に経験させられたK村の村人は、以後も継続的に村を出ることになる。まずはフライムのその後を見てみよう。1918年に徴用で白人農園に送られ、コーヒー摘みをさせられたフライムは、その労働が思ったより苛酷でなかったことに驚いた。彼は父親から聞かされた、奴隷のようなキャラバンの苦力のイメージが、「白人のための労働」だと思い込んでいたのである。だが彼の語りにもかかわらず、労働はやはり相当厳しいものであった。それは政府が定めた労働ノルマを見ても一目瞭然である。たとえばコーヒーの新芽摘みだと一日にガロン缶12から16杯、成熟した豆の場合には6杯、木の刈り込み枝打ちは一日20本から120本、除草や耕作は500から1000平方ヤード……といった具合にノルマが設定され、早朝から夕暮れまでの12時間労働を強いられたようだ。その代償として与えられる（最低）賃金は、契約労働者だと月4シリング、少年労働者にはわずか2シリングという低額であった。これでは年間12シリングの税金を納めるには、数カ月のタダ働きをしなければならないことになる。

この時代、税金の捕捉率は相当に高くなっていた。ヴィグル地方でもマハンガ村に市のたつ日には、アシスタントチーフやムランゴ（ヘッドマン）の護衛たちがうろつき、税金支払い済みのレシートをチェックし、持っていない男はすぐに逮捕して牛や山羊を差し押さえた。彼らには植民地政府からの報償金があった。1926年の時点では、チーフに徴収総額の2%、アシスタントチーフには月50シリング、ムランゴには月4シリングが政府から与えられていたのである（1926年北カピロンド県年次報告書）。

フライムの話しに戻ろう。彼は六ヶ月で徴用を解除され村に戻った。しばらく村で元通りの生活をしていて、1922年には16シリングにも跳ね上がった税金を支払うために、もう一度村を出る決心をした。今度は自分で出稼ぎ先を選ぶ自由出稼ぎだ。彼は前回徴用されたキクユ地区のそばのカベテをターゲットに選んだ。なぜならそこには隣り村のオワネとK村のアベリが働いており、かねがね待遇のよいことを宣伝し村の若者を勧誘していたからである。その勧誘によって、フライムだけではなくヴィグル地方の村々から10数人の若者がカベテにやってきた。彼らは12シリングの「高給」を手にして、そのうち10シリングを田舎に送金した。その金は主として牛や山羊を購入するのに使われた。

そのため出稼ぎ者の家族はすぐに区別できたという。なぜなら留守家族の飼育する山羊の数が目立って多くなるからである。こうした評判は、出稼ぎ、とりわけカベテへの出稼ぎに対する人々の抵抗を減少させた。

フライムが示した、知人、友人、親族間の個人的な勧誘によって行う出稼ぎの形態を個人勧誘型出稼ぎということにしよう。それはそれ以前の、政府の行政ルートを辿って強制力を行使しながら行われる徴用型の出稼ぎとは、著しく異なるものである。個人勧誘によって出稼ぎに従事する若者は、通常「デイチケット」方式と呼ばれる契約を行った。それは30日から最高42日の契約のあいだ、毎日チケットを切ってもらい、最後のチケットがなくなるとようやく賃金をもらうというものだ。

他にもサーバントには30日間の口頭契約で、また農園労働には六ヶ月の文書契約がなされ、それに違反したら刑事罰を受けることになっていた。こうした個人勧誘型の出稼ぎに対して、徴用型の強制労働は、大戦終了後徐々に減少し、1930年代にはほとんど見られなくなった。K村でも、1925年にウガンダ鉄道の支線建設のために5人の青年が送り込まれたのを最後に姿を消してしまう。時代は個人勧誘型の出稼ぎへと移行していったのである。だが個人勧誘型といっても、純粋に村人の個人的思惑で出稼ぎが行われたわけではない。その背景には彼らには不可視の歴史のダイナミズムがあった。アフリカ人農民と白人入植者、それに植民地政府の三つ巴のせめぎあいと、それをさらに包み込む世界システムの胎動があったのである。

カベテのコーヒー農園

当時カベテはどのような土地だったのだろうか。もともとキクユ人農民がトウモロコシやインゲンマメを栽培していたこの土地は、冷涼な気候と肥沃な地味が白人入植者も目にとまり、二度にわたる「王地条例」によって、キクユ人の手から完全に切り上げられてしまった。その後、カベテは1920年代になって急速に発展した。その中核となったのが、植民地政府がここに集中的に設立した獣医学などの畜産科学の施設群であった。その周辺の肥沃なキアンブ土壤に恵まれた地域には、多くのコーヒー農園が誕生していた。そのなかにはケニアで最も成功をおさめた女性入植者オリブ・コリヤー女史の農園もあった。

第一次世界大戦が終わりに近づくと、世界市場のコーヒー価格が急騰し、ケニアの入植者はこぞってコーヒー農園を拡張した。このプランテーションの拡大にともなって、必然的に労働力需要も増大していった。だがその需要は満たされることがなかった。そのため農園主は強硬に政府を突き上げた。労働力創出の常套手段である税は、今回も活用された。人手が最も必要な収穫期の労働力を確保するため、収穫直前に人头税を重ねて徴収することすら検討された。深刻な労働力不足に悩む彼らは、キリスト教化され「平和で勤勉な人種」である「カピロンド族」の移入を強く求めることとなった。

1925 年の政府への直訴状のなかで白人農園主の組合は、「我々はキスムの州長官に速やかにカピロンドをナイロビに送ることを求める。労働力不足のためすでに 50 エーカー以上のコーヒーの実が腐り土へ返っていった」と悲鳴をあげている。1926-27 年のコーヒーの収穫は大豊作だったが、再び労働力不足のため少なからぬ豆が放置されたままになってしまった。切羽詰まった農園主は、自ら労働力調達チームを結成して、西ケニアやカンパランド各地まで人狩りに出向いて行った。これがフライムたちがカベテへと引き寄せられて行った背景なのである。その結果、1926 年の北カピロンド県のアフリカ人 31 万 2944 人のうち男性の労働適齢人口（15 歳～40 歳）の実に 50% 以上にあたる 2 万 9213 人が、村を出て出稼ぎ賃労働に従事するようになった。

ブローカーの暗躍

労働力の需要と供給のアンバランスは、そのあいだを暗躍して利益を貪る労働ブローカーを生み出した。これが K 村人が経験した第三の出稼ぎ形態、ブローカー型である。西ケニアの場合、このブローカーの拠点はキスムに置かれた。その人狩りの手順は次ぎのようなものだった。まずカベテなどの白人農園主などから注文を取って、自分の配下のエージェントを西ケニア各地に派遣する。そこでチーフ、ヘッドマン、リグトゥ（村役）にそれぞれ手数料（賄賂）を支払いながら、未経験の村の若者を囲い込んだり、出稼ぎ経験のあるものに再度の出稼ぎを求めたりする。そうして確保した人間をキスムまで移送し、そこで州政府に一人一人の ID ナンバーなどを報告する。そのうえで州政府の医務官に健康チェックをしてもらい、合格証を受け取ってから列車に乗せて依頼主のところまで運ぶ。こうして狩り出したアフリカ人一人当たりについて、依頼主はブローカーに、移送代 5 シリングと礼金 10 シリングを支払うことになっていた。

白人農園での労働力不足が決定的に深刻化した 1920 年代後半になると、この種の労働ブローカーが雨後のたけのこのように林立した。キスム州政府が発行した労働力斡旋業者への営業許可証の数は、1927 年だけで 52 件にものぼっている（ニャンザ州年次報告書）。

この公認業者は、まだ健康診断、食事や毛布の支給、連行時の登録、注文主に拒否された場合の帰路の運賃の負担などが義務づけられていた。労働者保護とは言えないまでも労働力保護はなされていたのである。だが危機の進行とともに、許可証も持たない闇業者が暗躍するようになった。彼らは村々に押し入り、老人、少年、病人を問わず員数合わせのリクルート合戦を行った。狩り出されたアフリカ人は、満足な食事や寝場所も与えられず、健康診断もせずに遠くの農園まで連行された。出稼ぎ先で病気になり、農園主にも追い出されて帰りの汽車賃もなく、路頭に迷いながら死亡する出稼ぎ民の報告も少なくなかった。

以上見てきたように、徴用型、個人勧誘型、ブローカー型とそれぞれに異なった形態をもつ出稼ぎ回路が、勢ぞろいしたのが1920年代の西ケニアであった。オンビサの個人的なつっぱりにもかかわらず、時代は大きく出稼ぎ賃労働に向かって展開していたのである。

5 白人植民者 VS アフリカ人農民

1920年7月、東アフリカ保護領はケニア植民地・保護領へと名称を変更した。ケニア社会が激しく流動する20年代の幕開けだった。激動の波は白人入植者とアフリカ人の農民によって巻き起こされた。両者の利害は真っ向から対立するようになったのである。植民地の成立によって、ケニア社会は世界経済のなかに周縁部として組み込まれた。そこにおいてはサイザルやコーヒー、皮革、トウモロコシなどの一次産品をヨーロッパに提供することが求められた。この巨大なシステムへの包接の過程で、アフリカ人農民のなかにはそれに積極的に適応して商品生産に励むものも出現した。その結果第一次大戦前には、皮革、トウモロコシ、胡麻などを中心にケニアの輸出総額の四分の三近くは、アフリカ人農民の手によって生産されていた。

これに対して白人入植者の側はぱっとしなかった。彼らは最初、ヨーロッパで馴染んできた小麦、羊毛、乳製品の生産をアフリカでもやろうとしたが、これは大失敗に終わる。競争力のある輸出商品にはならなかったからだ。そこで入植者は、サイザル、コーヒー、トウモロコシ、紅茶に目をつけた。ここにアフリカ人農民の利害と白人入植者の利害は激しく衝突することになった。白人入植者にとって、アフリカ人農民が自らの競争相手として台頭することは死活問題であった。彼らが経営しようとするサイザルやコーヒーなどの大農園には膨大な肉体労働力が必要であり、それを供給できるのはアフリカ人農民しかいなかった。またアフリカ人の小農経営による集密方式のトウモロコシの生産は、白人の粗放方式のやりかたよりも生産性が高かった。つまり白人入植者は、アフリカ人に資本主義的な農業をせずに季節労働者となり、自分の食い扶持だけを生産する自給農業をやらせたかったのである。これが入植者経済の鉄則であった。

白人入植者がほとんどいなかったウガンダでは、バガンダ人農民が積極的に棉花栽培にとりくみ、世界市場への参入に成功していた。小農を基盤とする商品作物生産の経済が成立したのである。だがケニアの場合、アフリカ人が独立した農業生産者となることは許されなかった。その妨害の格好の例が、「コーヒー栽培」事件であった。

トウモロコシで成功したアフリカ人農民は、次により利潤のある輸出商品としてコーヒーに着目した。西ケニアでもカピロンド納税者福祉協会が執ように政府に栽培許可を要請した。これが実現すると、国内に強力なライバルが出現するのみならず、自分たちの農園の労働力不足も決定的段階に至ると危惧したのが白人入植者たちだった。彼らの恐怖は、1927年にキスムの近くで三人のアフリカ人農

民が、コーヒーの作付を強行したことでピークに達した。入植者の組織であるケニアコーヒー会議は、政府に絶対にアフリカ人に栽培を認めないよう強力に働きかけた。アフリカ人が栽培すると低品質で病気がちの製品ができケニアコーヒーの商品価値を著しく下げる、というのが彼らの勝手な言い分であった。彼らはアフリカ人が植えたコーヒーの木を引抜き、1933年にはロンドンまで出かけてイギリス政府や議会の実力者に強談判した。その結果、最後には思い通りにアフリカ人排除の保障をとりつけてしまったのである。

組織的抵抗運動の台頭

ケニアが世界経済に包接された1920年代、アフリカ人が独立自営の農民としてそのシステムに参入する道は閉ざされた。彼らに残されたのは、村内で自給農業を続けながら、村外で白人のための季節労働者となる道しかなかった。実際、輸出に占めるアフリカ人農民の生産物は、1929年には21.8%まで低下し、もっとも得意であったトウモロコシ生産の割合も15%まで落ち込んだ。そうした制限に輪をかけて、植民地政府はさまざまなアフリカ人管理の方策を制度化した。その代表的なものが1921年から施行された「原住民登録条例」である。この法律は、16歳以上のアフリカ人男子を強制登録させ、登録された原住民居住地を離れるときにはキパンデと呼ばれるカードを常時携帯しなければならないというものだ。ちょうど南アフリカでアパルトヘイトの中核制度としてかつて機能した「パス法」や日本の外国人登録法のようなものだ。キパンデには白人雇用主によって、職種、勤務態度、支払い賃金、雇用期間が書き込まれ、契約を破棄して逃散したアフリカ人や白人に対して反抗的なアフリカ人を随時取り締まれるようになっている。条例施行時には19万5千人のアフリカ人が登録されたが、その10年後には登録者は120万人にも達した。

こうした白人入植者と植民地政府の強圧的な態度は、アフリカ人の側に組織的な抵抗の機運を盛り上がった。1920年代始めは入植者経済に打撃が走った時期でもあった。1921年にはコーヒーやサイザルなどの輸出価格が暴落したのである。コーヒーは最高価格の4割に、サイザルは八分の一にまで価格が落ち込んだ。同時期に貨幣がインドのルピーからイギリス本国のスターリング貨とリンクしたシリングに移行し、ルピーの過大評価のためさらなる経済的打撃を受けた。政府はその苦境を税金のアップと賃下げによって、アフリカ人にすべてしわ寄せしようとしたので、抵抗運動は激しく燃え上がった。

組織的抵抗の中核は、ナイロビの周辺に住み、白人に土地を巻き上げられたキクユ人であった。彼らは1920年に、土地問題の解決を唱えてキクユ協会を結成した。翌年にはナイロビの電話交換手ハリスクたちが東アフリカ協会をつくって、強制徴募反対、人頭税・キパンデの廃止などのスローガンを掲げて起ち上がった。だが植民地政府は1922年3月14日スクを逮捕し、翌日釈放を求めて警察署

につめかけた数千人の支持者に発砲して多数を虐殺する。同じ頃西ケニアでも、アフリカ人の組織が誕生していた。

キクユ協会が設立された1920年、ルオ人とルヒャ人(両者はともにカピロンド族と呼ばれていたが、ルオは中央カピロンド、マラゴリなどのルヒャは北カピロンドまたはバントゥー・カピロンドと呼称されていた)の代表がキスムに集まり、教会伝道協会(CMS)の白人牧師オーウェンの指導で、ヤングカピロンド協会(YKA)が結成された。その目的は、相互の友好と福祉の増進という穏健なものであったが、当時の社会不安を反映してすぐに急進化した。人頭税反対やキバンデ廃止を要求するようになったYKAに政府は驚いて、オーウェンに非政治化工作を依頼した。巧妙な組織者であったオーウェンはYKAをまたたくまに福祉団体としてのカピロンド納税者協会(KTWA)に改組し、自ら会長におさまった。オーウェンとワンガ人のチーフに牛耳られていたKTWAに再び政治の波が押し寄せるのは、1930年代になってからのことである。

この初めての組織的な反政府感情は、K村からカベテに出稼ぎに来ていた村人も共有していた。当時カベテにいた村人の一人は、「一緒に農園で働いていたキクユの連中は税金はもう支払わないというし、キバンデがあったら自由に職場を逃げられないので困ったもんだと思っていたら、それも止めさせるというんでわしらは拍手したもんだ」と語る。こうした感情を集約したのが、1929年1月のマラゴリのチーフ、アゴイのナイロビとカベテの訪問であった。植民地政府の公安警察は、アゴイのナイロビでの行動を逐一マークして報告している。ナイロビのシティパークでのマラゴリ人の未届け集会において、彼はウガンダ鉄道の延線工事への反対を訴えた。工事がマラゴリランドで行われ、労働力の強制調達が計画されていることを恐れたのである。しかし制服の警察が巡回してきたのですぐに集会は親睦の集いにカモフラージュされ、それ以上続行できなかった。つづいてアゴイはマラゴリ人出稼ぎ労働者が多数働いていたカベテへも出向き、政府の鉄道延線計画に反対するマラゴリの連帯と団結の重要性を強調した。こうして村からの出稼ぎ民は、より大きな政治と経済のうねりのなかに主体として参画していくことになったのである。

むすび

植民地支配の記述は、マクロな構造からみれば、きわめて画一的でシンプルなものになる。しかし植民地支配が揺るぎなく確立したと思われた1920年代においても、場面場面、あるいは状況ごとに、諸力の力関係は錯綜しており、その状況に対するアフリカ人の側の解釈もじつに多様であった。その多様な彼らなりの状況解釈によって、新たな現実が次ぎの場面で築き上げられていく。このように諸力が交錯しあい、同じ状況に対しても異なる解釈が入り乱れるなかで生成される過程こそが、植民地社会を形成していたのである。

マラゴリの村人は、植民地支配という強力な暴力的なシステムのなかで生を営まざるをえなかった。彼らにはそのシステムの外部で生きる選択肢は存在しなかった。そのシステムにおいて彼らは、強制徴用の対象であり、白人入植者のために徴税され、単純労働力として酷使された。彼ら自身の慣習や信仰の多くは否定され修正された。しかしながらオンピサの一族は、こうした不平等な力関係が跋扈するこの世界でよりよく生きることを選択した。それは、たしかにそれ以外の選択肢がないなかでの選択であった。その意味で、植民地支配に寄生した白人（たとえばマローウ船長）が悩みながら行った「悪夢の選択」とは次元が異なる。しかし自らが被抑圧者になる世界に、自身と家族の成功をかけて没入する営みこそは、個人の悩める心性とは異なる次元での「悪夢の選択」かもしれない。

マラゴリの山村に暮らす人々の「悪夢の選択」は、植民地社会論だけでなく、主体とアイデンティティにまつわる議論を根源的に再検討することを要請しているのである。

参考文献

- アドゥ・ボアヘン編（宮本正興責任監修）1988 『ユネスコ アフリカの歴史』第七巻、同朋舎
 アーレント、H.（大島通義、大島かおり訳）1972 『帝国主義 全体主義の起源2』みすず書房
 井上俊、1992 『悪夢の選択』、筑摩書房
 岡田俊之輔、1997 「T.S.エリオットとジョウゼフ・コンラッド——『闇の奥』を巡って」『英文学』73号 早稲田大学英文学会
 グギ・ワ・ジオンゴ、（宮本正興、楠瀬佳子訳）1988 『精神の脱植民地化』第三書館
 コンラッド、J.（中野好夫訳）1958 『闇の奥』岩波文庫
 サイド、E.（大橋洋一訳）1998 『文化と帝国主義』みすず書房
 松田素二、1997「植民地文化における主体性と暴力——西ケニア、マラゴリ社会の経験から」山下晋司、山本真鳥編『植民地主義と文化——人類学のパースペクティブ』、新曜社
 松田素二、1999「西ケニア山村から見た大英帝国——個人史が世界史と交錯するとき」栗本英世、井野瀬久美恵共編『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』、人文書院
 松田素二、2000「下から見るアフリカの二〇世紀——あるマラゴリ人一族の100年を振り返る」少年ケニアの友・東京支部編『アフリカを知る』スリーエーネットワーク
 松田素二、2002（予定）「創られた王国の彼方に——西ケニア・ワンガ王国の歴史語りから」山路勝彦編『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会
 本橋哲哉、2001「キャリバン之歌、エリアルスの指、シコラックスの息——ポストコロニアル・テンベスト」杉島敬志編『人類学的実践の再構築』世界思想社

Ambler, C., 1988, *Kenyan Communities in the age of Imperialism-the Central Region in the Late Nineteenth Century*, Yale University Press, New Haven

Comaroff, J. & Comaroff, J., 1992, *Ethnography and Historical Imagination*, Chicago University Press, Chicago

Kyoto Journal of Sociology IX / December. 2001

- Cranworth, Lord, 1939, *Kenya Chronicles*, Macmillan, London
- Curtin, P., Thompson, L. and Vansina, J., 1995 *African History*, Longman, London
- Eliot, C., 1966(1905), *The East Africa Protectorate*, Frank Cass & Co., London
- Lonsdale, J.M., 1977, "The Politics of Conquest-the British in Western Kenya 1894-1908" *Historical Journal* 20(4): 841-870
- Perham, M., 1956, *Lugard-the Year of Adventure 1858-1898*, Collins, London
- Stichter, S., 1982, *Migrant Labour in Kenya-Capitalism and African Response 1895-1975*, Longman, London
- Strayer, R.W., 1978, *The Making of Mission Communities in East Africa-Anglicans and Africans in Colonial Kenya 1875-1935*, Heinemann, London
- Thomas, N., 1994, *Colonialism's Culture*, Polity Press, Cambridge
- Were, G.S., 1967, *A History of the Abaluyia of Western Kenya 1500-1900*, East African Publishing House, Nairobi
- Zwannenbergh, van R.M.A., 1975, *An Economic History of Kenya and Uganda 1800-1970*, Macmillan, London

ケニア植民地の行政文書については、ケニア国立文書館所蔵の下記の資料にもとづく。

- North Kavirondo District Annual Report (KNA/NN/AR/1910～1958)
- North Kavirondo District Political Record Book(KNA/NN/PR/1920～1935)
- North Kavirondo District Handing Over Report(KNA/NN/HOR/1920～1935)
- Kiambu District Annual Report(KNA/KIA/AR/1915～1928)

(まつだ もとじ・教員)

Colonialism and Subjectification: From an Ethno-historiography of Western Kenya during the 1920s

MATSUDA Motoji

'The Tempest' and 'Darkness of Heart' are most popular texts for post-colonial literary critique. One of the most stimulating sociological works in Japan of these texts is 'the nightmare of his choice' written by INOUE Shun, in which he examined a socio-psychological process of self-disintegration of Kurtz, a white colonialist in Congo in the work of Conrad. Hitherto, the issue of the self and subjectification in the colonial Africa has been found almost exclusively in simple discussions, in which the self of African people is always constructed in a process of victimization and therefore regarded as collective subject. To the contrary, the self of white settler is represented as an independent, unshakable modern individuality. INOUE avoided these hypotheses and analyzed the inner distress of a white settler.

Stimulated by his unique perspective, this study aims to consider relatively autonomous self-construction of African villagers in Western Kenya during the 1920s, when the colonial machinery was finally established in the British East Africa.

Are the local villagers passive victims of the forces of modernisation and institutionalization in the colonial domination? This study does not think so and, by focusing on the initiative and resistance created by ordinary villagers in their everyday lives, this study provides an alternative view to other discussions that basically ignore their everyday as they confront the forces of modernisation. While it is true that modern structures, such as the nation state, capitalist market economy, and organized Christianity, have been imposed in Africa, it is no less true that they are interpreted by people as they live their daily lives. By their actions, guided by the perceptions by which they make sense of the world, people adapt themselves to modern life even while they inexorably chip away at and patch new elements into its institutional formations. Examining the life strategies of villagers in Western Kenya, this study offers a refreshing discussion of the structural transformation of modern East African society.